かごしま ドクター便り

子宮頸がん予防 ワクチンと検診は両輪

3回にわたり子宮がん手術の話をしてきましたが、何はともあれ、がんにならないことが一番です。

特に子宮頸がんはワクチンと検診という有効な予防法があります。頸がんのほとんどは性行為で感染するヒトパピローマウイルス（HPV）が原因ですので、その殻のみで作った病原性のないワクチンを接種し体に免疫をつけてあげれば、その後HPVに出会っても感染しません。

性交渉開始前の女子に筋肉内注射するのが最も有効ですが、接種後（何ヶ月も後の場合も含んで）に慢性の痛みが全身に広がり、けいれんなども伴う難治性の病態が現れることがあります。マスコミなどでワクチンの副作用として報道され、政府もワクチンが原因である可能性を否定できないとして、2013年6月に積極的勧奨を中断。現在は接種を積極的には奨めないが定期接種として引き続き無償提供しています。

その後、この病態はワクチン接種の有無にかかわらず一定の比率で思春期の女子に生じるものと分かりましたが、いまだに不安に思って接種を控える女子は多く、この5年間の接種者は激減しました。詳細な情報は(http://wedge.ismedia.jp/articles/-/5510)などをご覧ください。

他国や世界保健機関（WHO）はこの日本の状況を懸念し、積極的勧奨を一刻も早く再開するよう求めていますが、政府は中断したままです。

現在のワクチンは代表的2種類のHPVによる感染を抑えますので、頸がん患者は約7割減ると見積もられています。残る3割も細胞診検診を受け、がんになる前の〝前がん病変〟の段階で見つけて治療すれば、子宮や命を失う悲劇は回避できます。

年に1回は受診してください。ワクチンと検診は〝頸がん予防の両輪〟。「10代でワクチンを！　20歳からは検診を！」が、われわれ産婦人科医の合言葉です。（鹿児島大学病院産科婦人科教授・小林裕明）

◆第1・3水曜掲載。